

CAF賞 2018 入選作品展覧会
Contemporary Art Foundation Award 2018

「CAF賞」は、日本全国の高校・大学・大学院・専門学校の学生、および日本国籍を有し海外の教育機関に在籍する学生の作品を対象としたアートアワードです。学生の創作活動の支援と日本の現代芸術の振興を目的に開催し、今回で5回目を迎えます。最優秀賞に選ばれた受賞者には賞金100万円のほか、副賞として個展開催の機会を提供します。また、入選者を含むいずれかのものに海外渡航費として50万円を授与いたします。

またこの度、「CAF賞入選作品展覧会」を11月27日(火)～12月2日(日)の6日間、東京・代官山のヒルサイドフォーラムにて開催いたしました。昨年の応募数をはるかに上回る中、本展では、絵画、彫刻、映像、インスタレーション、パフォーマンスなどあらゆるジャンルの入選作品を展示、11月27日(火)には最終審査が行われ各受賞作品を発表し表彰式とレセプションを行いました。

公益財団法人 現代芸術振興財団

- 現代芸術振興財団・設立者の前澤友作について

公益財団法人現代芸術振興財団は、2012年に、ファッションショッピングサイト「ZOZOTOWN(ゾゾタウン)」を運営する株式会社ZOZO(本社:千葉県千葉市)代表取締役の前澤友作によって設立。現代芸術に関する知識と教養の向上を図るため、現代アートの展覧会開催等による現代芸術の普及活動を行うとともに、若手芸術家及び若手音楽家を支援することによる技能の向上を図ることで、現代芸術の振興に寄与することを目的としています。

財団会長の前澤友作は、1975年千葉県生まれ。早稲田実業学校卒業後、バンド活動の一環で渡米。帰国後、1998年に輸入CD・レコードのカタログ販売を手がける有限会社スタート・トゥデイを立ち上げ、2004年、ファッションを中心としたインターネットショッピングサイト「ZOZOTOWN(ゾゾタウン)」を開設。2012年、2月に東証一部上場(3092)。同年11月に現代芸術振興財団を設立、現代芸術を中心としたアートコレクターであるとともに、若手アーティストの支援に力を注いでいます。

- 審査員



白石 正美 | SCAI THE BATHHOUSE |

1947年東京生まれ。SCAI THE BATHHOUSE代表。慶應義塾大学文学部美学美術史学専攻。89年より青山表参道の東高現代美術館副館長。国際的なアートマーケットを視野に国内外の現代美術作家を取り扱う「白石コンテンポラリーアート」を設立。92年にアートフェア東京の前身となるNICAFを立ち上げた。SCAI THE BATHHOUSEを台東区谷中に開設。一方、谷中の地域の活性化を進め、「カヤバ珈琲」や「上野桜木あたり」を再生。近年、若手アーティストのための実験場として「駒込倉庫」や新しい視点のスペース「SCAI PARK」を天王洲アイルにオープン。



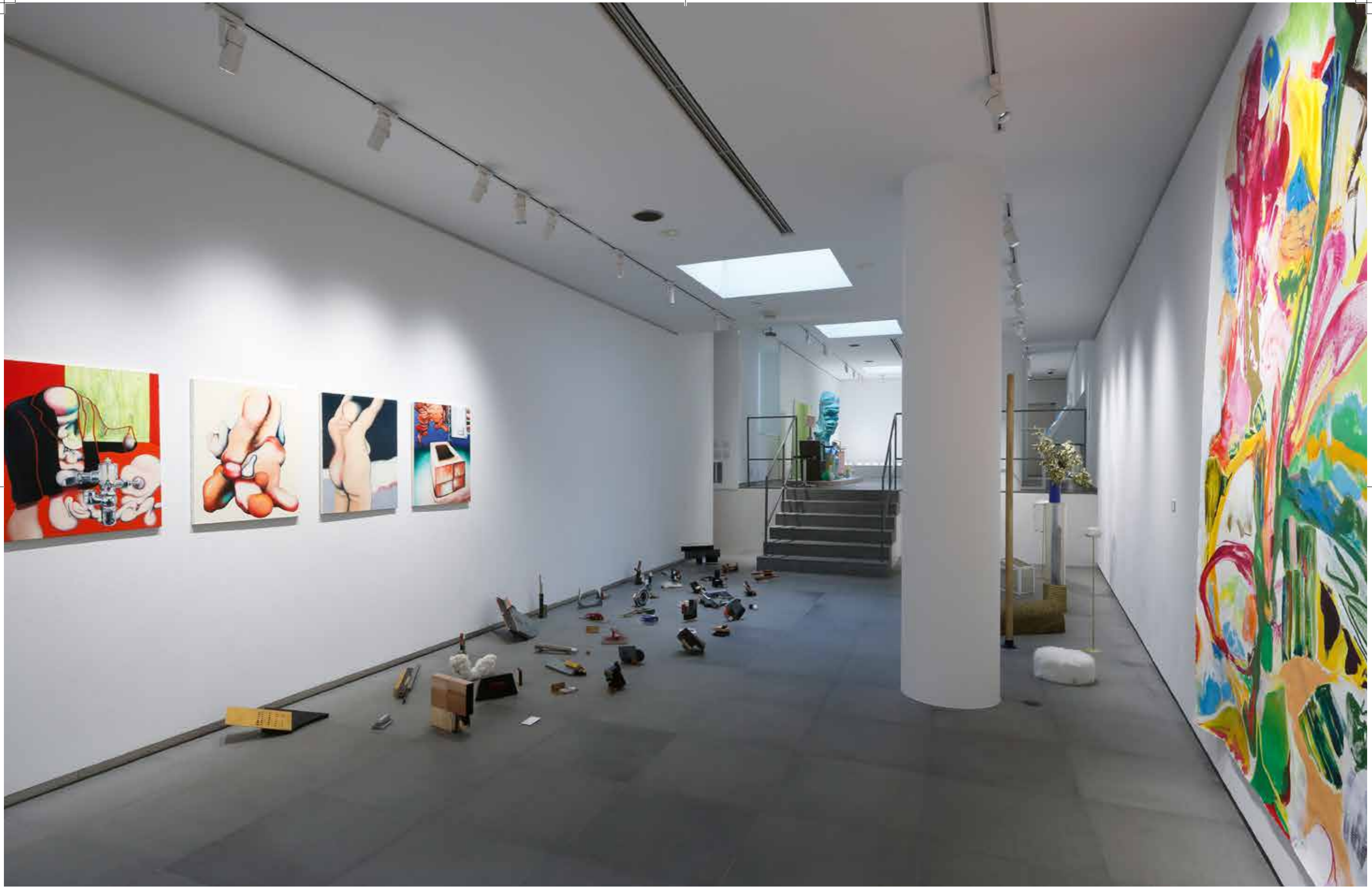
藪前 知子 | 東京都現代美術館 |

1974年、東京生まれ。東京都現代美術館学芸員。これまで企画担当した主な展覧会は、「大竹伸朗 全景1955-2006」(2006)、「MOTコレクション 特集展示 岡崎乾二郎」(2009)、「山口小夜子 未来を着る人」(2015)、「おとなも子どもも考える こはだれの場所?」(2015)、「MOTサテライト 2017春 往来往来」(2017)(以上、東京都現代美術館)など。キュレーションの他に、雑誌等に日本の近現代美術についての寄稿多数。札幌国際芸術祭(SIAF)2017にバンドメンバー(企画チーム)として参加。



齋藤 精一 | Rhizomatiks |

ライゾマティクス代表取締役/クリエイティブ&テクニカル・ディレクター。1975年神奈川県生まれ。建築デザインをコロンビア大学(MSAAD)で学び、2000年からニューヨークで活動を開始。06年にライゾマティクスを設立。建築で培ったロジカルな思考をもとに、アートやコマースの領域で立体作品やインタラクティブ作品を制作する。







最優秀賞

根本 祐杜 Yuto NEMOTO

東京藝術大学大学院

つくられた壺

2017 ミクストメディア サイズ可変

オリンピックから優勝劣敗という競争原理やエンターテインメント性を取り去ったら、何が残るだろうか。

このつくられた9つの壺には、その小さな答えが描き込まれているようだ。声を張り上げ水面に立つ波紋を競うゲーム、円盤ではなくステーキ肉の投擲を競うゲーム、粘土質の壁をひたすら殴り続ける相手のいないボクシングなど、一見すると意味をなさない、ふざけた物語だと思えるかもしれない。しかしながらそれらが成立する共同体や時代があったとしたらどうだろうか？ 無為の競技が開く、誰も傷つけないそこは、もしかしたらある種のユートピアと呼べるかもしれない。



> website



審査員講評

エンターテインメント性を抜いたオリンピックゲームというユニークなテーマを聞き、まず「やられたな」と思いました。全世界が注目するオリンピックをアートに取り込み、「人体」「戦い」「造形美」などのアートの言葉を織り交ぜながら、彼の感覚の中で自分の作品に活かしています。古めかしい壺と、台座の材質の違いが気になって、さらに作品の奥に入り込んでしまいます。作品自体もどこかの画廊で展覧会をやっても十分に見栄えのする、しかも同時代的な問題点をきちんとはらんだ作品として成立していると思い、今回の最高賞にふさわしく、全会一致で賞を授与することにいたしました。(白石)



白石正美賞

仲 衿香 Erika NAKA
東京造形大学

CVS
2018 キャンバスにアクリル サイズ可変



まず、自分の作る絵ひとつひとつにストーリーは無い。ストーリーとは映画や小説での表現分野であり、絵画には必要のない要素だと考える。あくまで自分の絵を作る理由は、絵画にしかできない表現の追求である。
絵画にしかできない表現とは、作り手と支持体の純粋な駆け引きの中で生まれるものであると考える。
絵の具を支持体に厚塗りにのせると絵の具が自分の予想を超えた動きをする瞬間があり、支持体と自分の間に“ズレ”が生まれる。思い通りにならないその“ズレ”にこそ、人の手でしか作り出せない魅力があると考え制作している。
現在、日常で見かけるロゴマークを絵の具で厚塗りにしていく「iconシリーズ」を制作している。今回は誰もが見たことのあるコンビニエンスストアの「icon(画像)」を絵画に落とし込むことで、作品が鑑賞者にどのような作用をもたらすのかを試みている。



審査員講評

コンビニエンスストアのロゴをペインティングにした作品です。既に一種のメッセージ性を持っているデザインを正面から題材にして描くというチャレンジングなことを、あえてやってしまうところが非常に面白いと思います。既成のイメージを使うのは、ポップアートでやることですが、この作品はそこをすり抜けて絵画として成り立たせている所に注目しました。加えて、所有したいと思わせる作品だと思いましたので審査員賞をお贈りしました。(白石)



藪前知子賞

田嶋 周造 Shuzo TAJIMA
武蔵野美術大学

She bent tech thin tight (思弁的身体).
2018 キャンバスに油彩 F20号のキャンバス4枚

私は自分の外部に任せて絵を描いている。メディウムの手触りや絵具の物質としての可塑性、筆と絵肌との摩擦、筆を握る自身の身体性といったものが絵をあるところまで持って行き、落ち着いた時点で完成だと考える。そうした私を導く『私』でないもののマイクロな力が、描かれた人間をまた、このような姿にしていると考え。



> website



審査員講評

戦後すぐ、歪められた人体をテーマにしている1950年代の日本の絵画を彷彿とさせる密度のあるペインティングに惹きつけられました。彼自身のサブカルチャーへの興味も伺えますが、日本の戦後美術からサブカルチャーを貫く、独特の湿り気のようなものが画面の中に現れていると感じました。画歴はまだ2年と短いことに驚かされましたが、今後の大成を期待して賞を差し上げます。(藪前)

齋藤精一賞

持田 敦子 Atsuko MOCHIDA

東京藝術大学大学院

T家の転回

2017 木造家屋、鑑賞者の手動により回転
4分41秒(ビデオドキュメンテーション)
動画撮影:重浩介

水戸市にある木造家屋の中央部分が直径5mの円形に切りとられ、回転構造上に再構築されている。作家の祖父母が暮らしたこの家は、まるでひとつの肉体のように子どもの出産とともに増築を繰り返し、現在は老いて崩れかかっている。また制度としての家は公と私を隔離し、土地と血縁をベースとした家族という濃密な人間関係に個人を絡めとってきた。木造建築物の構造を切り離すことを、「縁を切る」という。家に絡みつ়縁を切り離し、他者の手で家を回転させることで、内と外が入れ替わり、新たな機能と空間をつくりだす。



> website

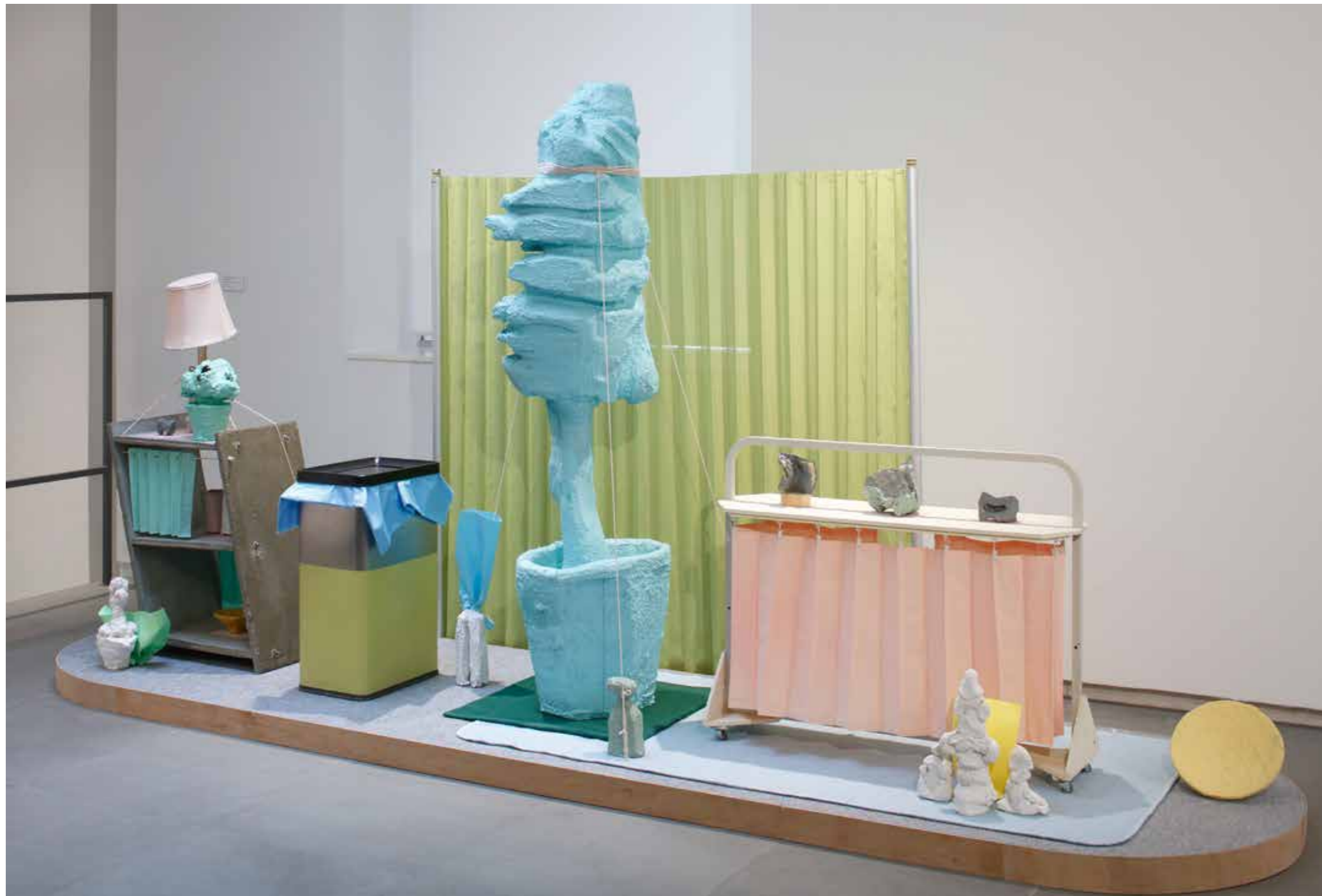


写真: 谷浦龍一



審査員講評

持田さんの作品は建築的であり、コンテキストであり、イベント的である新しいタイプの作品だと思いました。少子高齢化や過疎化の時代の空き家問題やインターネットが空気となった今だからこそ見えているように見えなくなってくる個人の歴史というものを自身の創作能力と美術の力で発信していると感じました。このような社会メッセージと個人の2つが共存し、強く込められた作品を応援する意味でも個人賞として選ばせていただきました。(齋藤)



海外渡航費授与

大石 一貴 Kazuki OISHI

蔵野美術大学大学院

架空の男による私のドキュメンタリー

2018 ミクストメディア 220cm×350cm×100cm

壁紙は白い、白いのだが部屋の蛍光灯はオレンジ?的な物にわざわざ交換したので部屋は暖色だ。夜はそれが部屋を照らすから、白いはずの壁紙は黄色い。朝、目を覚まして窓を開けた時だけ唯一、部屋の本当の色を思い出すのだ。あー、ただ太陽の色が本当に部屋の色を照らしているかどうかは実際わからない。部屋の家具にも色があるし、部屋の隅にある観葉植物は枯れた緑をこちらに向けている。そんな朝の新鮮な色が私に部屋の色をわざわざ明々とさせているんだらう。蛍光灯の白を基準におそらく生きている私はそれを白として考えた方が良さそうだ。太陽の白は俺の幼少の頃の白なのである。さっきのインターホンはたぶん宅急便だろう。昨日のことは忘れてしまった。

生活家具と、わずかな人の気配をモチーフとして、異質な生活空間を構成する彫刻作品やインスタレーションを制作している。人は1人の空間でも1人ではない。例えばひとつの家具の配置においても、他人からある軌跡と因果を持ってその場の状況を作り上げ、そして対峙させられる(様々なインテリアの出生のストーリーが一同に介している状況との対峙)。すると未知な他人と自分、そして家具との境界が不明瞭になっていく。記号として残りながらも、それぞれが単一に、均等になろうとする。同時に、対するモノの機能や記号を引き入れ、拡散する。因果が伝染していくのである。



審査員講評

オブジェの間にある、見えない因果関係の読み取りが興味深い作品です。それぞれのものが自律しつつ、いかに関係性を結ぶかという芸術にとって普遍的なテーマを追求されています。ただコンセプト先行に見えるきらいもありましたので、日本を離れたところで、ご自身の考えていることの本質を掴みなおしていただきたいという思いで選考いたしました。(数前)

OUYANG ZIXUAN

女子美術大学大学院

石

2018 絵具、金属、アクリル、木材 サイズ可変

「石」というもの、普段わざわざ注視することのない「ただの」石ではなく、本来の「ほかのもの」としての「石」そのもの、その存在-畏怖すべき存在としての「石」に触れる時、何を考えているのかを問う。



> website



大西 晃生 Akio ONISHI

京都精華大学

portrait

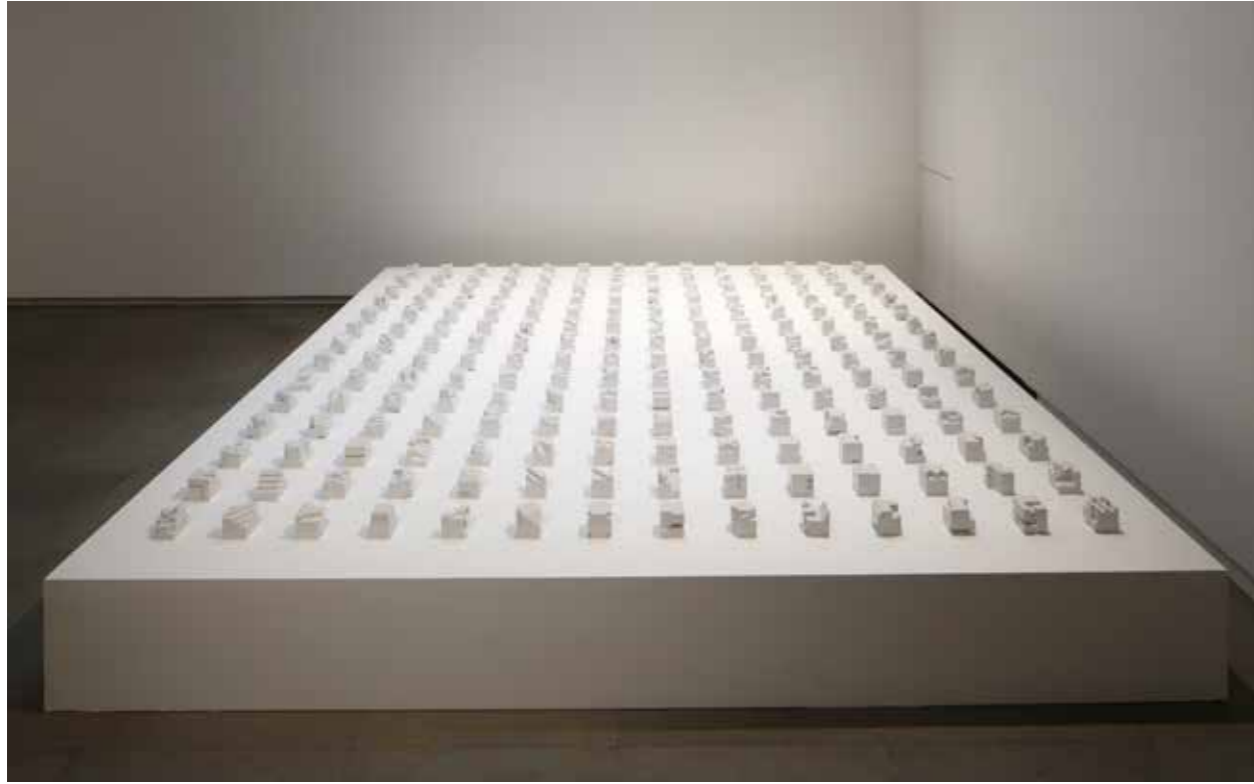
2018 キャンバスにアクリル、アクリルガッシュ
100cm×100cm×6cm

SNSによって見る・見られると言う関係を多くの人間が強く意識するようになった。それにより、本来の自分とは違う、演出され奇形化した自分というものがSNS上に存在しているのではないだろうか。現代に適應するため、そして非現実的なイメージに押し潰され、過剰なまでに形を変えた「人間」の姿がそこにある。



> website





大原 由 Yu OHARA

東京藝術大学大学院

代官山トライアウト

2018 パフォーマンス with 山本未知

この作品は展示期間中、同じ格好をした二体の人間が絶え間なく展示空間に居るというものである。日常的な動きをパフォーマンスとして扱い、鑑賞者は会話や睡眠、アイデアを出す過程などを目の当たりにする。このパフォーマンスは、代官山ヒルサイドフォーラムが所有しているル・コルビュジエ作「LC2 1P」という椅子を二脚借用して行なわれた。



大野 由美子 Yumiko ONO

シュティグリツ美術工芸大学大学院

ユートピア

2018 磁器(ハードペースト) サイズ可変



私はロシアにてソ連建築を主に研究し、それに基づき作品を制作している。この卒業制作「ユートピア」は、1つの立方体を196種類にカットすることで作った196個の抽象的なオブジェによるインスタレーションである。196という数字は世界に存在する国の数であり、これらのオブジェはそれぞれが国を表している。日本という小さな国の出身である私にとってユートピアとは、世界の国々が尊重し合える力関係の存在しない世界である。この考えに基づき、これら196種類の異なる形のオブジェは全て同じ重さで作られている。



佐藤 華音 Harune SATO

東京藝術大学大学院

あの地

2018 映像、立体アニメーション 4分8秒

ずっとずっと前。生まれる前、死ぬ前に、誰もが来たことがある。そんな場所の話。セット内を彷徨うようにカメラを移動させながら、物や影などを動かし、一コマ一コマ撮影した。



> website



菅谷 杏樹 Aki SUGAYA

東京藝術大学大学院

Honey Oath

2018 はちみつ、蜂の巣、映像 サイズ可変

アラニアの洞窟には木に登って蜂の巣を採取している「蜂蜜を採取する人」が描かれている。約10,000年前から人類は木の上の巣に手を伸ばし、危険を冒して、その聖なる食べ物「蜂蜜」を手に入れようとした。

だが現在、ミツバチは人工授粉、農業、大気汚染、過度の品種改良によって、謎の大量死を繰り返し、世界から減少している。ミツバチによる授粉が行われなければ世界の食料の三分の一以上が実らなくなると言われているが、私たちはミツバチに変わる存在を生み出すのか、それともミツバチとともに滅びていくのか。私たちはもっと優しい関係を築き始めることはできないだろうか。



> website





辻梨絵子 Rieko TSUJI

東京藝術大学大学院

I hope you are happy

2018 PVC、アクリル樹脂、圧縮ウレタン、メタル、布、ガラス
サイズ可変

外国へ簡単に行けるようになったこの時代に、遠距離間のコミュニケーションを、デジタルな方法以外でどう深めていけるだろうか。銭別の花を閉じ込めたアクリルの柱、記念樹をコピーした彫刻など、そのままでは海外輸送不可能な植物を材料とし、実際に国外から空輸できるよう加工したオブジェで構成したインスタレーションである。

温室のような箱や、生花やプラスチックの造花などをメタファーに、華やかな旅の裏にある、空になった実家や関係を繋いでゆく人々のやりとりといった、作者自身の経験を通して見た国際化の進む社会の側面を表現している。



> website



スクリプカリウ落合 安奈 Ana SCRIPCARIU-OCHIAI

東京藝術大学大学院

KOTOHOGI

2018 布にピグメントプリント、マット紙

「異質」(土地や民族による差異)と「同質」(人類の根源的共通性)が、一冊の中で波のように繰り返す。日本とルーマニア、2つの祖国における「信仰」を紐解く。日本は極東の島国、ルーマニアはかつての社会主義国の影響から、タイムカプセル的存在と表される事がある。火や水の祭は、多くの国にある。それらのイメージを連続させると、どれがどの国のものかわからなくなってゆく。「過去と現在」「見える世界と見えない世界」が結びつく瞬間を追い求め、分断されたかのように見えるそれらを縫い合わせ、地続きにする事を試みる。



> website



星野 陽子 Yoko HOSHINO

東京藝術大学大学院

INTERSECTION

2018 ミクストメディア サイズ可変

2次元と3次元の空間の往来で生まれた絵画です。平面のドローイングを、インスタレーションとして立体に起こし、それを又絵画にした。イメージを元に、絵画の中に入れていける空間を作成し、その中で切り取った一枚の絵画の側面、内面をまた描いた作品である。それは同時に、日常生活において感じるさまざまな正面と側面のズレ、目に見えないことについての興味からくる、物と物の間の出来事を探る行為である。



山縣 俊介 Shunsuke YAMAGATA

多摩美術大学大学院

Jumping Lucy #1,2

2018 キャンバス、綿布にアクリル
212cm×173cm、275cm×200cm

人類の始まりの祖先としてエチオピアで発掘されたLucy(ルーシー)。その名前は彼女が発見された1970年代に流行していたビートルズの曲の名前の一部を取ってつけられた。後にラミダス猿人という種が実は最古の直接的な人類の祖先という事になったが、ルーシーという名前がついた330万年前の類人猿はまだまだ僕の想像を刺激している。表現の起源というロマンを垣間見せてくれる気がするからだ。ルーシーがジャンプする。ルーシーにジャンプさせられる。そうやって起源のストーリーを描いている。



CAF賞 2018 入選作品展覧会

2018年11月27日(火)～12月2日(日) 11:00-19:00
代官山ヒルサイドテラス F棟 ヒルサイドフォーラム

OUYANG ZIXUAN 女子美術大学大学院

大石 一貴 武蔵野美術大学大学院

大西 晃生 京都精華大学

大野 由美子 シュテイグリツ美術工芸大学大学院

大原 由 東京藝術大学大学院

佐藤 華音 東京藝術大学大学院

菅谷 杏樹 東京藝術大学大学院

スクリプカリウ落合 安奈 東京藝術大学大学院

田嶋 周造 武蔵野美術大学

辻 梨絵子 東京藝術大学大学院

仲 衿香 東京造形大学

根本 祐杜 東京藝術大学大学院

星野 陽子 東京藝術大学大学院

持田 敦子 東京藝術大学大学院

山縣 俊介 多摩美術大学大学院

主催 | 公益財団法人 現代芸術振興財団

会場設営 | HIGURE 17-15 cas

グラフィックデザイン | Dynamite Brothers Syndicate

会場写真 | 木奥恵三

ポートレイト、審査写真 | 西田香織

公益財団法人 現代芸術振興財団

TEL 03-6441-3264

E-mail contact@gendai-art.org

